
円卓の女騎士

丸尾 ナオキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

円卓の女騎士

【Nコード】

N96810

【作者名】

丸尾 ナオキ

【あらすじ】

かつて神と悪魔が激戦を繰り広げた大地、ルフィーラ。大戦後は人間が住みつき世界の大半を支配したが、人々は大戦時の遺産『魔剣』の所有権をめぐって争いを続けていた。その内の一国、神聖アラスティア王国の若き女騎士マリーはある日、これから勇者になるであろう男のサポートを頼まれる。その男とは異世界から召喚されたごく普通の大学生、小野田満オノダ ミツルであった。戦いを知らない男と戦いしか知らない女、時に協力し、時には対立しつつも彼らは戦場を駆け巡る。

Warfortwo(前書き)

戦闘シーンは今後もアームロック程度しか出てきません。

War for two

これまでの経緯を話すと長くなるが

私の名前はマリー＝トレットロント。

大陸最大の国家、神聖アラスティア王国において、先祖代々帝の御側に仕えてきた由緒正しきトレットロント家の長女である。だが、私の代では子宝に恵まれず父母ともに早死にしたため、代わって私が幼少期から男児のように育てられ、武術、軍略、作法、帝王学などを仕込まれてきた。

そして18歳の誕生日、ついに私はアラスティアが誇る12人の騎士団長、通称『円卓の騎士』の一人に命ぜられた。あの時はまさしく感無量であった。幼いころから女子のくせに生意気だと言われて蔑まれ、辛酸をなめ続けてきたが、そのように宣い続けてきたものどもを一瞬にしてひれ伏せさせるような権力、と同時に皇帝陛下に直接拝謁することが出来るという身に余る光栄を頂いた。と、同時にこれからは大部隊を指揮していかなければならない、大勢の部下の命を預かる役職に就いたという大いなる責任を背負うことになった。

私は戦った。

古くから我がアラスティアと敵対関係にある憎きバーツライト王国の連中を一人でも殺すために、そしていずれはこの大陸の戦乱を治め、戦乱におびえ続けるか弱き民衆に平穏な日々を与えるために、私は寝る間も惜しんで戦略を練り、常に最前線で戦い続けた。円卓の騎士に任命されて3年もの間に、我が騎士団は12もの敵戦略拠

点の攻略、そしてバーツライトの傀儡である小国家テオエヴィールの制圧にも大きく貢献した。

戦いだけの毎日だったが私は満たされていた。

他の騎士団長からもお前は戦うために生まれてきたような女だと一目置かれ、帝からアラスティアにおいて最高の栄誉の一つである『ゼブフォー勲章』も頂いた。勲章授与式の時、私は帝の御前にも関わらず、思わず感極まって涙を流してしまったものだ。…今思い返しても恥ずべきことだが。

いずれこの地に平和を

そう思い戦い続けてきた。

いや、私は戦うことしか知らなかった。

戦うことこそが私の生まれてきた意味、宿命。

それなのに

「あつっ！」

今の私は武器を外し、鎧や服も全て脱いで完全に極めて無防備な状況下にいる。

本当なら護衛が欲しい所だが、『この世界』には誰も彼以外には頼れる人物がない。

その唯一頼れる彼も今席を外しており、いつ戻ってくるかは皆目見

当もつかない。

この状況下で頼れるのは己の体のみ

「くっ！ どうすれば！ このままでは湯浴みが出来ぬではないか
！」

全面白塗りの、触った感じ割と柔らかく薄い壁に囲まれた空間。
その中の大きな湯浴み用の槽の中には大量の湯が張ってある。
だがその湯が：火傷するかというくらい熱すぎる！

ここは、彼の住居の湯浴み場である。

この世界ではほとんどの住居にこうした場所が設置しているらしい。
家の広さ自体はどちらかというと貧民層の家かと思まぐつくらい狭
いのだが、その分非常に機能的にできている。
そしてこの湯浴み場もその一つ。

「ミツルはこの赤い部分をひねれば湯が出ると言っていたが：こ
の世界の住人は皆このような熱い湯を浴びているのか！？」

いや、『私の世界』に来たときのミツルはそんなに逞しい体では無
かった。

何か温度を調整する方法があるはずだ。

「やはりここは冷水で埋めるのが定石か： だが水はどこだ？」

今私の周りにあるのは、何やら小さな容器がいくつか： まさかこ
れを使うわけではあるまい。あとは桶に、白い塊： これは石鹼か
？ この世界にもあるのだな。あとで使わせてもらおう。この小さ
な棒はなんだ？ 先にあるのは： 刃か！ 護身用にしては頼りな
いな： いや寧ろこれは毛剃り専用か。うーむ、後は何かないか：？

「やはり… 二二か！」

この赤い栓を捻ると湯が出てきた。ならばこの隣の青い栓は捻って… おっと逆だ。こっち側に…

すると蛇口の先からまた液体が流れてきた。…冷たい。

「ふふ… 勝ったぞ！ この程度の修羅場、あのイアテクツフォ平原の激戦に比べたら…」

イアテクツフォ平原の戦い。

あれは私が円卓の騎士になって5カ月くらいであったか、あの頃は私も未熟だった。

ドフツツ卿が率いる騎士団との共同戦前であったな確か。

戦力差は五分五分であったが、バーツライトは僅かに小高い丘に陣を構えており地の理は向こうにあった。

しかし我が軍には切り札として純血種ルフェリアンで構成された法術部隊があった。

あえてこちらの大軍をあまり分散させずに平原上に展開すると、敵は馬鹿めと言わんばかりに丘の上から、大砲や弓を撃ってくる、だがそこへ法術部隊が防御結界を張り防ぐ。

部隊の散開させないのは、結界範囲を狭くして法術部隊たちの負担を減らすため。

すぐさま、我が歩兵部隊が丘の上に取りつき敵陣を攻める…

ここまででは良かったがその後のバーツライトの抵抗も凄まじいものであった。

純粋な戦力差は元々五分五分だったから、そういう事態は十分に想定できた。

先の作戦は向こうの地の利に対抗しただけにすぎない。その後の戦

いは

思い返すだけでも熱くなる死闘だった。

あの敵部隊の指揮官のバーレットとかいう男、また手合わせ願いた
いものだ。

出来るのならば…

石鹸で髪と体を洗いながら過去の武勇譚に浸っていると、外から足
音が聞こえる。

玄関の側からの音… 彼が戻ってきたか。

この住居の玄関が開ける音がして、彼の帰還を知らせる声が聞こえ
てくる。

思わず私も急いで体についた泡を洗い流し、湯浴み場の戸を開け彼
を出迎える。

「ミッル！ 私はやったぞ！ しかし初日から私を試してくるのは
感心しないな！」

「え、え？ ただいま、マリ…イ？ あっ…」

ミッルの手には白い袋と黄色い袋が握られている。

これまた私の世界では見たことのない素材だ。

「ミッル。その袋は…？」

「ん？ ああこれが晩飯。そしてこれがお前用の服。サイズ適当だ
けど、とりあえず…」

ミッルの視線が一瞬私の顔の下に言ったかと思うとすぐに横に逸ら
す。

…あ。

「…服着てくれ。これが体拭くタオル」
「わ、私としたことが！ 迂闊だった！」

私が『この世界』に来てから彼、ミツル「オノダには世話になりっぱなしである。」

私とミツルとの出会いはもう半年前になるか。

彼は『私の世界』を救う『聖剣』振るいし勇者…の候補としてこっちの世界から召喚された。

彼が私の世界に来た時に世話役を務めたのが私の率いる騎士団である。

ミツルは自分は学士だと言っていたものの、ろくに文字も読むことすら出来なかった。歴史、科学などもからつきし、その上武術の経験も無いなど、騎士団の一員、いやこの世界に生きる人としてもとても使い物にならなかった。

なんでこんな無能の穀潰し野郎を騎士団に置いておくんだ。

当然、団の皆からは不満の声が上がった。

しかし、彼は世界を救う勇者になれる素質がある…可能性がある。

しかも帝の命令だ、逆らうわけにはいかない。私は必死に部下をなだめた。

だが、彼も彼、「俺は戦争なんかやりたくない」ときたもんだ。

当然、部下からは出てけ、出てけの怒号罵声。

私の部隊は常に最前線で戦っており、屈強で気性も荒い男たちが多い。

館のメイドにも頼んだが、根性の無い男は嫌い、と彼を粗末に扱っ始末。

流石の私もなんとかしてくれないかと国側に直訴したが、後の調べでどうやらミツルは『聖剣』の適性が無かったということが告げら

れた。

要は勇者でもなんでもなし。一般人。外れ。用済み。

力も無い、戦う気も無い、字もまともに読めなくらい頭も無いということ、もう挽き肉にして家畜の餌にでもしようかと思ってい
たらしい。

流石に敵でも無い、犯罪を犯したわけでも無い人間を殺すのは気が引けたので、先のことは知ったことではないけど、とりあえずここかの片田舎に逃がしてやるかということ、夜中に彼の部屋を訪れたもの

まあ色々あって今に至るわけだ。

しかし、今では私が当時の彼の立場にいる。

彼の家に来るまでに辺りをざっと見回してみたが、全く文字が読めない。

それに私は『この世界』の歴史や文化など知らないし、おまけに彼が言うにはこの世界の戦争では剣や弓など使い物にならないらしい。まさか今度は私が彼のような目には

いやいや私は由緒正しきトレットロント家の生まれ、そして選ばれし『円卓の騎士』の一人なんだ。

たとえどんな所であろうとやっていけるはず。

きつと彼のことだ、『この世界』では自分のほうが優位な立場にいると思っ
て、今までの仕返しと言わんばかりに私を脅しているつもりだろう。

この私を屈服させようとしてもそうはいかんど、軽く叱っておかねば…

食事の後にでも。

…この服、少し大きいがいい感触だ。良質の糸を使っているな。彼なりの気遣いと受け取っておこう。

彼の家の居間はとても狭い。

寝台と卓と金属製の机と棚が部屋の4割を占めている。

すぐ隣には炊事場。

部屋の中央にある卓には杯と先ほどの白い袋が置かれている。

「よしっ！ お湯も湧いたし。マリー、服のサイズはどうだ？」

「問題ない。着心地のいい服だ。寝巻には最適だな」

「じゃあ、飯にするか。この世界の食事がどんだけ口に合うかわからないけど…」

そういつて彼は袋からまた杯のようなものと箱を取り出し私に渡す。

「この箱は… 一体何の素材でできているんだ？ 中身が透けて見える。しかし硝子ではない。軽い」

「あー、プラスチックとか見るのは初めてなんだよな？」

「ぶらすちつく？ しかし、どうやってこんな素材を作り出すの？ この世界は錬金術のようなものも発達しているのか？」

「俺も詳しくはわかんね。石油… 地面から出てくる油から作っているみたいけど」

「地面から… 油？ この世界は変わっているな」

「まー、とりあえず食おうぜ」

それもそうだ。実は私も相当腹が減っている。

これがミツルの世界の食事か。どんなものか御手並み拝見といこう。まずミツルは箱の蓋を開け、それから細長い紙でできた袋を破り、

出てきたのは… 木の棒。それを二つに割って…

「あ、そっか！ マリーは箸を使って食べるのは初めてか！」

「箸… この木の棒がそうか」

「これでおかずを取って食べるんだ。できそうか？ 一応スプーンやフォークもあるけど」

「箸は暖炉や火鉢の炭を動かすのによく使ってるだろ。金属製のだから。運ぶものが食べ物に変わったただけだ、なんら支障はない」

ふふ、ミツルの奴め… 私を甘く見たな。

私も木の棒を裂け目に沿って二つに割り、二本の箸を器用に動かして見せる。

「どつだ」

「持ち方がちょっと違うけど… まあ問題ないな」

持ち方だと！？ これ以外にどうやって持てと言っただ。

負け惜しみだ。きつとミツルの奴の負け惜しみ…！

「おっと、味噌汁にお湯ついどかないと」

「みそしる？」

「ああ、これ、スープだよ。この国の名物」

「スープは普通先に飲むものではないのか？」

「この国では飯と一緒に飲むんだよ」

そう言うと、ミツルは杯の蓋を開け中から銀色の小さな袋を取り出し、袋を破って内容物を杯の中に再び入れる。何だろう。練り物のようだったが…

「これにお湯を注いで… 熱いからもう少し経ってから飲んでくれ」

「これがスープだと？ 随分と簡単に作れるんだな」

私自身料理の経験はあまりないが、美味しいスープを作るためにはそれなりの手間がかかると聞く。様々な具材を入れて丁寧に長時間も煮込んで…

スープとはそのような奥の深い料理なのだ、こんな片手間で出来るような物をスープと呼ぶのはおこがましい。城の調理人達に失礼だ。あまり味は期待しないでおう。

さて問題は主なおかずだが…

「ミツル、これは何と言う料理なんだ？」

「えっと、から揚げ弁当。から揚げつてのは、鶏肉に衣を付けて油で揚げたものだ。その茶色い丸い塊。」

「なるほどな。して、この脇に添えられているのは？」

「これはキャベツつていう野菜。食物繊維が豊富で便秘によく効く。小さい穴に入っているのが高菜、から揚げの味ばっかりだと飽きるから合間に食べるんだ。」

「この下の段の箱いっぱい敷き詰められている、白い粒は？」

「これは米って穀物を炊いたもの… そういえば向こうの世界では見かけなかったな。要はパンの代わりだよ。パンはこの世界にもあるけどさ」

パンの代わり… ということは特に味はしないというわけか…

味のある物を上段に、そして主となる穀物を下段に持っているわけだな。

「それとこの小さい袋は？」

「一つは胡椒つていう香辛料、唐揚げ用だな。向こうの世界で言うところのブドナンシだ。もう一つはレモンつていう果物の汁、とて

も酸っぱい。これも唐揚げ用だな」

「少しずつ味を変えて楽しめるといっわけか」

「まあ、そんなところかな」

さて、御託を並べるのはここまでとしよう。そろそろ私の空腹の限界だ。

あまりにも初めて見る料理が多いので驚いたが、もう種はわかった。後は味。

まずは唐揚げ、胡椒とレモンの汁の分量的に味はそのままでも十分についているはず… 半分ほどかじって…

「う、美味しい！」

「おー、良かった良かった」

というかなんだ、この中から滴り落ちてくるほどの肉汁は。くそう、美味いじゃないか。

「そこで、下の米を食うんだ、そうすると舌の感覚が元に戻る」

言われたとおり米を食べてみる。

予想通り味はしない。だが…

「なるほど、これで全体の味のバランスを整えているわけか。」

「そーそー、うおっ！ そういえば俺も米食うの半年ぶりだったんだ！」

目の前でミッルも私に負けじと米を口に掻きこんでいる。

「うひ〜、これだよこれ！ やっぱり日本人の飯には米が無いと！」

歡喜の声を上げるミツル。

そんなにこの米を食べたことがうれしかったのだろうか、目尻に光るものが見えた。

さて、次はキャベツ、何かタレのようなものが掛けてあるな。

キャベツ単体では… ほとんど味はしない。タレが味の決め手になるみたいだ。

便秘にも効くみたいだし添え物としては及第点か。

その隣の高菜。

これも濃いめの味付け。美味くはあるのだが、こんな少量ではあまり味わえない。

そして二個目の唐揚げを食べている最中に、目の前から汁を啜る音が聞こえる。

「ミツル、スープを飲むときは音を鳴らすな。散々叱られただろう？」

「いいんだよ、この国では。これが正しい飲み方だ」

そういえばスープ用の匙もない。

ミツルは杯に直接口を付け箸で内容物を口に掻き入れている。

下品だ。まったく。

これだからスープのことが分からぬ国は。

しかしそれが掟ならば仕方ない、不本意だが。ちょうど汁気も欲しくなってきたところだ。

私も杯を手に取り口に近づける。

「あつ…！」

「ん？ どーした？ マリー」

「い、いや…」

「味噌汁は初めてだよな。こっちの世界にもこの匂いがダメって人がいるから、もしかしたら口に合わないかも」

「だ、駄目…？ この香りが…？」

「あ、うん」

（馬鹿なばかなバカな馬かなバ鹿な）

ズズウ…

コト

…

…だ。

「マリー？ やっぱダメか？」

、酷…だ！

「は？」

「残酷すぎる！」

むごい、なんてむごいものを！

「この芳醇な香り！ このコクのある味わい！ たった湯を注いだだけだと言うのに！ 毎日のように苦勞してスープを炊いている調理人達の苦勞は一体何なんだ！」

「それは微妙に聞き捨てならんな… 味噌、このスープの元は出来るまでに一カ月以上はかかるんだぞ」

「な、なら… こんな美味しい物をこの世界でしか味わえないなんて残酷すぎる！」

「おいおいマリ… え？ ちょっと？ 泣いてる？」

「おお… うまい、うまい〜」

「こ、壊れた！？」

この味が、香りが、私を引きつけて離さない。

ん？ なんだと？ 終わりか？ もう終わってしまったのか？

至福の時間が…

ああ…

アラスティアに生まれアラスティアの地で育ち、生きてきた。

私の愛する国。私の帰るべき国。

そしてその価値観が絶対だと思っていた。

ああ、帝よ。戦の女神ソラリティ＝ミスンよ。

どうかお許してください。

私は外の世界に、大地に、恋をしてしまった…

「ちょっと待て！ たかが味噌汁でどんだけ世界広げてんだよ！」

「たわけ！ ミツル如きがみそしるの何がわかる！」

「ええ〜？」

私は空になったみそしるの杯を見る。

杯の淵から僅かに汁がしたたり落ちていた。

そこにあるのは空虚。

しかし、それが中に入っていたという事実がその空虚な杯さえも愛おしく感じさせる。

「そ、それよりもだ。ミツル…」

「…ん？」

私にはまだ足りない。

もっと、もっと満たされたい。

戦いではない、真の充足、そして安息がそこにある…気がする。

「み、みそしるのお替りはないのか？」

「…買ってくるよ」

…この世界も悪くない。

W a r f o r t w o (後書き)

続く…かも。

Home alone

午前七時四十五分。朝ごはん終了。

「 ということで、俺はこれから大学に行かにならんのだが」

何が』ということだ。いいからもっとみそしるをよこせ。足りん。こんなものでは足りん。

「 マリー、一つ言っておくが、朝っぱらから味噌汁飲み過ぎると塩分の取り過ぎで高血圧になるぞ？ 心臓止まっても知らないぞ？」
「 構わぬ。元々私は血の気が少ない方だ」

「 そういう問題じゃ無くてだな。つか意味分かってないだろ。それに俺から見たら十二分に血の気ある方なんだが」

「 私はこの『油揚げ』というものが入ってるのが好きだな。油ものがこんなにスープに合うとは意外だった。帰ったら、城の調理人達に教えてやるぞ」

「 いや、人の話を聞け」

今まで豆腐入り、油揚げ入り、なめこ入りの三種類を食させてもらったが、この油揚げのなんとも言えぬ美味。少量しか入っていないのが非常に惜しい。

なめことかいうきのこは… 正直口に合わん。ミツルの奴が一番体にいいのに、とか言っているが、あのような滑り気があるきのこは大概何かしらの毒を持っているということとは常識ではないか。

「 それにだな、マリー。今『帰ったら』とか言ってたけど、どうやって『向こうの世界』に帰るつもりだ？」

「 これから探していくしかないだろうな。私たちがこの世界に来る

前： あの状況下を再現すればあるいは…」

「だからそれが無理なんだって。この世界には『魔剣』とか『法術』とかそんなぶつとんだものはないんだって」

「何かそれに近いものは？」

「ない」

こいつめ、きつぱりと言い切りおった。

「ずいぶんと非協力的ではないか… 貴様は元の世界に戻りたくはないのか？」

「戻りたくない！ それに俺にとってはこっちが『元の世界』なんだ。ただでさえこっちでも散々面倒事が残ってるってのに」

「面倒事とは？」

「もう半年もこの家空けてたからな。親からも搜索願出されててこっちは大変だったんだ。『異世界に飛ばされました』なんて言えっこないからごまかすのも大変だったし。昨日一日で電気水道ガスを復活させただけで奇跡的なんだ。不動産や家主にも謝りにいかんとならんし。親にだってなんて説明すればいいか。」

なんか知らんが色々問題が山済みのようだ。本当に知らんが。

「その上学校も行ってないから、単位が色々とヤバいことになってるんだ。これからしばらくの間1限から5眼までフルで出ないといけないからな… バイトもフェードアウトしちゃったし、また新しいの探さんと。」

知らん。わけがわからん。

「とにかく、俺はこれからかなり忙しくなる！ 今日の帰りも遅くなる！」

「私に構っている暇はないということか」

「そこなんだ。とりあえず今日一日、お前は一切外に出るな。誰か来ても無視しろ。この家で静かに留守番しとくんた。下手な物音も立てるなよ」

「なん…だと…！」

ミツルのやつ、この世界に来て早々私を軟禁するつもりか？

「なぜ外に出てはいけないのだ！」

「思いつきり不審者だからだ！ お前はこの世界のことほとんど知らないだろ？ 見た目も外人だし、誰かに話しかけられたりしたらどうする？ どの国から来たんですか？ とか聞かれてみる！」

「アラステイアから来たと答えてはだめなのか？」

「出身国を聞かれる アラステイアと答える この世界にそんな国は無い 不審に思われる 警察呼ばれる パスポートの提示を要求される そんなもん持ってない タイーホ 牢獄行き」

「…この国の警備は中々厳しいものだな。そこまで警戒されなければならんのか？ 異世界から来たと言うだけで」

「この国でそんなこと言つてたら、街ゆく人がみんなお前の周りを避け歩き、後ろ指をさされて笑われ続ける羽目になるぞ。『あの人がアタマ逝っちゃってる』ってな。んで、黄色い車に連れてかれてベッドの上に鎖で縛り付けられると」

「いったいどういふところなんだこの国は！」

「法治国家だ！ そしてお前は今のところ立派な不審人物なの！」

この国はこの世界の中でも割と裕福なほうでな、金目当ての柄の悪い不法入国者が後を絶たないんだ。だからそれなりに警戒してるってわけ！」

ぬう。

話を聞く限り、この国は元々から異人を極度に警戒する風土のよう

だ。

それなら私の世界に来たときのミツルの慌てっぷりも納得がいくというもの。

正直私もこの国の勝手が解からぬし、しばらくの間大人しくするしかないのか…

「…わかった。私はここに残り他に元の世界に戻る手立てがないか考えておこう」

「いや、考えなくていいから。俺は二度とあっちの世界に行きたくないし。寧ろ考えたところで無駄だと思うし」

「まだ… わからん…!」

「まあそんなこと考えることよりもお前は他にやるべきことがある。ほれ」

ミツルはそういって、紙で出来た薄い冊子を私の前に差し出す。

表紙には私にはなじみ深いアラスティアの言語… 『マリー用』とか書かれている。

相変わらず汚い字だ。

しかし、よくよく見ると上質な紙だ。文字も墨で書かれたようには見えないし。

紙には一定間隔で薄い直線が引いてある。文字の並びを整える工夫だろう。

これも良い発想だ。帰ったら製紙部の奴らに提案してみるか…

「これは？」

「俺が昨晚作った、この世界の言語… 日本語の教科書。時間無かつたからまだ未完成だけど。とりあえずはこれでこの世界の言葉を学んでくれ」

「何故私がそんなことを」

「向こうの世界に帰るにしろ、この世界にはしばらくいなきゃなら

んだろーが。言葉はどうしてか通じるかも知れんが、文字がわかっ
てないとロクに生活できないぞ」

「半年前のお前と同じ状況というわけか…!!」

「そうだ。そしてこの冊子には俺の半年分の苦勞が詰まっている。
アラスティアの言語とかこの世界じゃ小説のネタにくらいいしかなら
ねえ。無駄な知識詰め込ませやがってと言いたいところだが、今の
お前の役には立つかな」

こいつ… 私の世界の歴史ある言語をなんだと…

ミツルはそんなことはお構いなしに自分の右腕に付けている小型時
計に目をやり、やや慌てた表情をして口早に告げてきた。

「俺はもう行くからな。いいか？ 絶対外でるなよ？ 昼飯はそこ
の袋の中に入ってる。作り方も書いておいたから。あと湯の沸かし
方とかはもう大丈夫だな？」

「…ああ」

「んじゃ、行ってくる。帰りは八時くらいになるかもしれないが大
人しくしとくんだぞ？」

適当に頷く私を見た後、彼はやや急ぎ早に玄関を開けて部屋を出る。
…少しして外から鍵の閉まる音。

そうして私は一人この家に取り残された。

時計の針の音が30回くらい鳴った後、思いつきり卓を右拳で叩く。

「…私は子供か！」

くそう。

くそう。くそう。

このアラスティア円卓の十二騎士が一人、マリー＝トレットロント。生まれてこの方二十余年、このような屈辱は生まれて初めてだ。

年下の男に子供扱い。しかも無能の烙印を押されて、だ。

しかもそれは相手のつまらない嫉妬や妬みから出た言葉ではなく、おそらく私を心配しての言葉。それが余計に腹立たしい。

そして今、この世界では無能かもと自分でも思っているところが一番悔しい。

…くそう。

示さなければ…

私もこの世界で堂々とやっていけるといことを…！

異世界の文字がなんだ！

とりあえずミツルお手製のこの世界の言語の教科書とやらをめぐってみる。

なにになに？ この国の言葉、日本語は文字だけで千種以上あるけど、とりあえずはこの五十音と呼ばれる46文字を覚えてくれ？ 五十音とか言ってるくせになぜに46文字なのだ？ 後は濁点、反濁点を付けてさらに音が増える？ なんとややこしい。

文字も何か丸っこいのが多い、可愛いとは言えそうだが、この「ぬ」と「め」とかなんと紛らわしいことか。色々と欠陥があるのでないか？ この言語は。

先のページをめくる。

そこでは日本語を使った単語にアラスティア語の訳が加えられていた。

こんなにもあるのか…

更に先のページ。
日本語の例文にアラスティア語の訳。

『わたしの なまえ は まりー とれんとろつと です』

こんな子供じみた文をこの年になって学ばねばならないとは。

『わたしは あめりか の てきさすしゅう から きました』

あめりか？ てきさすしゅう？ 一体どこだ？

『これは あなたの いえ ですか』

『いいえ これは かのじょの むすめ です』

家と少女を見間違えるか！ 知能障害でも負っているのかこいつは！？

「駄目だ。だめだだめだだめだ！」

こんなのを全部覚えるなど気が遠くなりそうだ。

冊子を卓の上に放り投げ、床に仰向けに寝っ転がる。

下品ではあるが、今は誰も私のことを見ていないだろう。監視や斥候の心配も無い。

自分の体勢を楽にしたら、今度は大きなあくびが出る。

いつものようにこらえる必要などなく、当然手で口も押さえることもしない。

考えてみれば語学の勉強など幼少のころ以来だ。

一時期、部下に勧められて古代言語にも手を出してみたがさっぱりだったな。

元々勉強はそんなに好きな方じゃなかったのだろう。

「やはり戦いの日々の方が落ち着く……」

ボソリ

… 妙だな。思わず自分の口から出た言葉だが、考えれば考えるほど妙だ。

帰りたい。

高貴な身分の出が、文字一つ読めないなど。ただの平民と同類ではないか。

鍛えぬいた剣術や馬術も、所詮私一人だけではどうにもならん。

誰かに仕えるにしても、文字すら読めないとなると単なる一兵卒程度の扱いだらう。

うう、想像するだけでも嫌だ。帰りたい。

つい昨日までは、国の先頭に立つ一軍の将だったというのに。

不安が、私の心の中にこれまで味わったことのない不安と絶望が

帰りたい…

………

………

…

…でも、みそしるは… 飲みたい…

起き上がる。そして昨日の袋を弄る。

何事も前向きに、希望を持って。そう母様も言っておられた。

「そうだ！ 帰る！ 私は何としても元の世界に帰るんだ！ そうと決まれば、こんな世界の言語の勉強などしておれぬ！ 一刻も早く元の世界に帰る手段を見つけねば！ そしていつ戻ってもいいよう存分にみそしるを飲んでおかねばな！」

上を向こう、前へ歩こう。たとえどんな困難が待ち受けたとしても今の私には唯一ともいえる心の支えがある。

この世界で出会い、初めて恋をしたあの飲み物が

てか絶対に元の世界に持ち帰ってやる。

城の技術開発部の連中にあの味と香りの研究をさせねば。

我が家の個人資産をつぎ込んででもあれと同じものを作らせねば！

みそしるがあれば戦地に赴く兵士の士気も上がるだろう。

早期の大陸統一も夢ではない。

「私は！ あきらめんぞ！ この！ みそしるを！ 死ぬほど！ 飲み干す！ まではあ！」

破る。昼食の入っている白い袋を、修復不可能なくらいに破り捨てる。

がっ！

「無…い…！？ みそし…るの素が無い？」

ち、違うんだ。きっと他の袋に…
無いっ？

「まさかミツルの奴、どこかに隠したか！？」

私は部屋の中の棚という棚を探す。開ける。

…何だこの冊子は。随分と精巧な絵だな。まるで本物… 女の裸？
まあいい、今はそれどころではない。

「どこだあっ！ みそしるは… どこだあっ！」

ドタドタ バタバタ

探す探す。

そして三時間経過。

「はぁーっ、はぁーっ！」

見つかりませんでした。

「お…おおおお…」

涙が… 何故だ… たかがスリーブじゃないか…
なのに何故私は泣いているんだ…！
ついさっき出会ったばかりだというのに…
なんでこうも胸が締め付けられてしまうんだ。

苦しい、この胸の内は一体…
この気持ちは…

恋… なのか…？

これが恋という奴なのか…？

戦いしか知らない私をどこまでもどこまでも優しく包んでくれる味。
肉料理のようにただ人を鼓舞し力づけるのではなく、むしろ心の奥
底に隠れた不安や孤独を慰めてくれる。そう、まるで母上のごとく。

どこからともなく声が聞こえてくる…

『おお、マリーよ。恋に落ちてしまつとは情けない』

『そんな、帝よ、お許しを。ですが胸が、胸が苦しくてもう私は戦
えそうにないのです。
どうか、どうか…』

『戦えぬのならば仕方あるまい、本日をもって貴様を円卓の騎士か
ら除名する』

『そんな！ 帝よ！』

「お待ちください、帝よ！」

背後から探索のため積み上げた書物の山が崩れ落ちる音がした。

「ハッ!？」

私は一体何をやっていたんだ? いかんいかん。

時計を見ると短針が「12」を示していた。おそらくは既に昼時…
癩だが今はみそしるの件は今は諦めよう。後でミツルに買いに行かせればいい。

先ほどから動き続けてすっかり腹もすいてしまった。

ううむ、随分と部屋を散らかしてしまったな。

ミツルが帰ってくるまでにはまだ時間がある。ひとまず今は食事にしよう。

みそしる抜きだが仕方あるまい…

必死に今の状況を恋の病に犯された心を納得させつつ、

びりびりに破かれた袋の残骸から昼食と思わしきものを取り出す。

手に持った感触では割と柔らかいが、形態を維持する程度の強度は十分に持ち合わせている、これまた円柱型の杯。この世界の人々は随分とこの形にこだわるな。

みそしるの容器に似てはいるが持った感触では全然違う。

ミツルが残した書置きにはお湯をかけるだけで出来る麺料理だと書いてある。

もう一つは透明な袋に入ったパン。丸くてふわふわしている。

パンは私の世界にもあるがここまで柔らかいのは出来たて以外お目にかかれない。

なにになに? あんことかいう甘い豆の練り物が入ったパンだと?

パンに甘味を挟むのは「是」だはと思うが、豆を甘くするなんて発想は無かった。

最後に丈夫な厚紙のようなもので出来た小さな四角柱の箱。押すとペコペコと簡単にへこむ。えっと、これは？

10種類の野菜と5種類の果物をすりおろした飲み物？野菜分少ないから、だと。

とりあえずはこれだけで夜まで凌ぐとしよう。

…ああ、みそしる。

何はともあれまずはこのカップ麺とやらを調理せねばな。湯を沸かさう。

やかんに水を注ぎ… この鉄の管から水が出る風景にも慣れてきたな。

そしてコンロとかいう物の上に乗せる。

最後にこのツマミを勢いよく右に。

カチッ

一発で青い火が着く。

「ふ、ふふふ、どうだ、私だってやれるんだぞ？」

しかし火とは赤いもののはずだが、どう違うのだろうか？

まあいいか、湯が湧くまで他の物に手を出そう。

まずはカップ麺の準備。まずは蓋を半分開ける…ってこれだけか！確かに中には麺のようなものが入っている。その上には干からびた具のようなもの。

それと何らかの粉。湯を注いで3分待てば出来上がりって、大丈夫なのか？

と、なるとしばらくやることがないな。

ならばパンを… いやこれは甘味だ、メインの麵の前に食べるのはもったいない。

うーん。野菜ジュースとやらを飲んでみるか？ いやいや、これこそ締め飲み物だ。

やはりパンを、豆の甘味… 甘い豆… 逆に気になってくるではないか。

だがしかし、甘いものは最後に食べるのが私の、じゃなかった、我が家の流儀だ。

だから早く湧いてくれ、湯。

…

… この青い炎、実はそんなに熱くないんじゃないだろうか？

…

… あ、沸騰してきた。

よし、この煮えたぎったお湯をこの杯の中へ入れる。

そして即座に半分まで開いた蓋を閉め、箸を載せて封をする。
どうだ！

「3分だったな！？ 今から3分！」

瞬時に時計の前に駆け込んだ。

湯を入れた時刻は… 時計までの移動時間を考慮すると、最も動きの速い針（おそらくは秒針）がこの「2」と「3」という文字の間に来た時だ。

この世界でも一番長い針の一周が一分のはず。

封をする時間はきっかり3分、それを守れなかった場合は一体どうなってしまうのか？

何にせよ気の抜けない時間との戦いだ。針の動きを凝視するんだ。

…

…くそっ！ 長い！ ここまで長い三分間はあのエスブナティの丘の戦い以来だ！

あの日、私の部隊は敵を奇襲するために、敵陣の後方で息を潜めていた。

その分前線の人員を割いているために先発隊は苦しい戦いを強いられ、劣勢に陥っているのは誰の目に見ても明らか。

すぐにも飛び出して助けに行きたい所だが、時を待たねばならなかった。

一人、また一人とほとんど囿に等しい先発隊の仲間がやられていく…その時、部下の一人ロブが… ううっ。あの馬鹿者め！

無惨にやられていく仲間をこのまま見ていられないと我慢出来ずに突撃しおつて！

先日息子が生まれたんですと皆に喜んで報告していた矢先にこれだ。残された若い嫁殿とまだ小さい子供に向けてお前の戦死を伝なければならぬこちらの身にもなってみろ！

あの嫁殿は泣かなかつたな… 細い体だが、強い女だった…

つてしみじみと回想している場合じゃない！ 何週だ？ 針は何周した！？

むう、このおそらく「分」を現す針の動きから見てまだ二周半、危ない所だった。

今度は先程の移動時間も考慮に入れなければならない。3秒前に動くのが最良だろう。

冷や汗が頬をつたる。落ち着け… マリー…

3、2、1、 今だ！

即座にその場を横飛び、カップ麺の蓋に手がつくまで2、1、ついた！

箸をふるい落とし蓋の先端に指をかけた！

「ハアツ！」

蓋をはがす、この時がきっかり3分！

すぐに蓋の中身を見る。中から程良い鳥ガラのスープのような匂いが溢れ、先程は『魔源』が枯渴した地域一帯のごとく干からびていた具も生氣を取り戻し、健康的に艶やかに膨らみきつている。

「よかつたな、お前達。そして、今回も私の勝利だ！」

さあ、これから勝利の宴といこうじゃないか。まだ昼だけど。とりあえず深呼吸をして精神統一。初めての食べ物に少し無駄に張り切りすぎたようだ…

戦闘中以外の食事はゆっくりとるのが元々の私の信条。これだけは譲れん。

ゆくぞ、カップ麺。

まず箸を麺の渦巻く中に突っ込んで軽くかき混ぜる。

平麺の一つ一つがほぐれ、私は立派な麺料理だ、とその形相を現す。

ずるずる。

うむ、少し味が濃いが中タイケるぞ。麺も湯を吸って量タップリだ。さて具の方は… まずはこの黄色いの。

…このフワツとした食感は、卵、か。

うん、この卵の程良い甘さが濃いめのスープと美味しく調和してるな。

次にこの立方体の茶色の、ぱく。

繊維っぽい感じ… 肉？ これも中々。

しかし、肉だとしたらどうやって作っているのだろうか？ 湯を入れる前は確かに干からびてたはず… 干し肉か？ いや、干し肉を湯で戻すと言うのはあまり聞かない。長時間煮込むのならまだしも、こんな3分という短時間でこのような状態まで変化するとは… どれ、もう一つ。

くちや、くちゆ。

うーん、わからん。

では最後に最も気になるこの白と赤の縞模様の渦を巻いている物体。これは一体… むぐ。

わからん。適当なものが思いつかん。風味的には魚介系か？

そういえばアラステイア近海で取れるゴーヴィの味に似てる気がするけど…

ずるずるずる。

しかしなんだ、簡単に調理できるにもかかわらず、卵、肉、魚介？

とツボを押さえてきてるのは評価できる。これだけの量で十分な満足感だ。

…野戦食に取り入れてみたいな。持ち運びは軽くて楽、調理も簡単で、美味いとなると長期の行軍にぴったりではないか。また一つ持ち帰る物が増えたな。

汁は残そう、味が濃いから喉が渴く。

よくよく考えてみたら、湯を入れてから食うまでの時間はきっちり決められているのにも関わらず、食い終わる時間は特に定められていない。食う速度は人それぞれだろうに。

もしかしてきつちり3分間計る必要など無かったのか？

なんか10分前の張り切りまくっていた自分が恥ずかしくなってきた。

まあいい、次はいよいよ甘味だ。

このあんパンとやら、貴様の實力を見せてもらおうか。

私は甘いものにはうるさいぞ？ いやいや決して目が無いとかいうわけでは無くて。

あまりにも斬新な発想だから気になるだけだ。だからそんな図体で見つめ返すな。

ふにふに。

うっ、柔らかい。はむ。

…優しい甘さだ。

練り込めるほどに柔らかく煮た甘い豆と羽毛布団のように柔らかいパンとの絶妙な相性が何とも言えない。タマラン。

しかし元から甘い豆なのか、砂糖などで甘く煮たものなのか…どっちだ？

いや、どちらにせよ豆を甘くして菓子にするといいのも悪くない。

これも今度、城の調理人に…

待て。

なんだかさつきから感心してばかりではないか。

一つの物を食する度に多くの発見がある。あれもこれも元の世界に持ち帰りたい。

まだまだこの世界には私の知らない物があるのだろうか。

うっ。

うっうっう。

葛藤が。私の中で葛藤が。ぐるぐる回る。

いかんいかん。締めとしてこのすりおろし野菜でも飲んで頭を冷やそう。

この箱の側面に付いている「すとろー」とやらを袋から出して、伸ばして、この丸い銀色の部分に指す。なるほど、ここが曲がるのか、良く出来てる。細かい仕事だ。

はずず。

…甘い。

甘いのはいいことなのだが、野菜ジュースと銘打っておきながらこんな甘い味を出されるとかえって不安になる。ほんとに野菜入っているのか？

じゅるじゅる。

ふう。

…このすとりーは使い捨てか？

口紅が汚れないで済むから皇女殿にも勧めたいところだが、毎回このような複雑な管を作るのは大変だな。専用の職人を雇うのもどうかと思うし。

というより、直接飲んだ方が早いのでは？

これは要検討だな。

…

再び葛藤が頭の中に湧き出てくる。

今すぐにでも元の世界に帰りたくはあるが、この世界の技術力は捨てがたい。

これまでも伝承として何度か耳にはしたが、まさか自分が異世界に飛ばされるなどは思わなんだ。滅多にある経験ではあるまい。

この世界の技術を持ち帰れたら…

いや、口頭で伝えるだけでもいい、元の世界でも再現できるようにすれば…

大陸国家統一…

更には民にもっと豊かな暮らしを提供することが出来る。

帝も大喜び。民も万々歳。

そして私は…英雄だ。

魔剣士など恐れるに足らんほどに。

一時、僅の間だけ恥を耐え忍べばいい。
その先にあるのは…輝かしい栄光、名誉。

「ふ、ふふふ…」

狭い部屋にいるせいか、堪えているはずの笑い声が妙に響いて聞こえた。

いやこれはもう笑うしかないだろう。誰だって笑うだろう。
英雄だぞ？ えい ゆう。

この四文字の示すところを自分に向けることが出来るのだ。
その機会が転がっているというのだ。この世界の至る所に！
このまま国に戻ってどんな活躍をしても、所詮は一軍の将に過ぎぬ。
更なる高みを目指すにはそれ以上の、国の躍進に大きく繋がる手柄
が必要だ。

うむうむ、これからの時代戦うだけでは駄目なのだ。

そうとわかれば勉強だ、勉強。その先にある希望あふれる未来へ向
けて。

耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍べ。

一日でも早くこの世界の言語を習得し、技術を吸収せねば！

7時間後。

「ただいまーって、暗っ！ え？ マリー、寝てんの？」

「私をそんなぐうたらな女だと思ってるか？」

部屋の角にある机。

そこに小型の灯りを点ける装置があったので、この明りで黙々と勉強を続けていた。

「まさか… 今までずっと勉強していたのか？」

「ふふ、私を誰だと思ってる！ …と、言いたいところだが、今回ばかりには貴様に感謝せねばな、ミツル」

「へ？」

「私に華を持たせてくれたことだ」

ぼかーんとなっているミツル、この世界に来ても相変わらずの間抜け面だ。

まあいい。

「ミツル、一つ確認しておくが、この世界の人々は『私の世界』のことなど知らないし、またその存在を信じようともしないのだったな？」

「ん、まあ…ね」

「ということは、この世界の国がアラスティアに攻めてくることはまずない。友好国でも敵対国でもない。中立… あるいは、日和見」

「この世界の技術をアラスティアに持ち込んで何ら問題は無いということだな？」

「…出来るもんなら」

「その言葉、忘れるなよ」

ふ、ふははははは。

「アラスティアに栄光を！」

「夜中に大声出すな！」

笑いが止まらん！

帰ったら自分が英雄扱いされると思うと如何とも！

このマリー＝トレントロットの名が未来永劫伝えられると思うと！

なんか、隣でミツルがわめいているが。知らん。

…っと、そうだ。

「ところでミツル」

「なんだよ」

「この実物からそのまま切り取ってきたような絵は、如何にして描いているのだ？ 貴様は破廉恥なことに使っているようだが」

r i s k o f b l o o d s h e d

「あ、母さん？ 携帯買い替えたから、番号登録してくれる？ え
ーっと新しい番号は - x x x x - 。 え？ もう一回
？ のー」

これは… なんとという道具だ！

離れた場所の相手とも話が出来ると！？

これさえあれば前戦と後方部隊との連絡手段が密になるぞ。

いやいやアラスティア本国からの直接の指揮も出来るかもしれない。

昨日は食い物ばかりに目がいつていたが、これこそ私が求めていた

「英雄」になるための異世界の技術！

これ一つで『ゼブフォー勲章』は軽いぞ！

「…なんだよ、ひつついてくんな」

「私にも声を聞かせてくれ。どんな感じなんだ？ これさえあれば
戦場での情報伝達において圧倒的有位に立つことが出来るかもしれ
ん」

「え？ あ？ 女の声だった？ ああ、いま大学の構内にいるから」

「仮も自分の母君に堂々と嘘をつくな！ というか無視するな！」

『なんなの、満？ なんか聞こえるけど。どなた？』

おお、聞こえる。少し声が小さいが確かに壮年の女性の声が聞こえ
るぞ！

「ミツルの母君か？ 私の名はマリー＝ト」はぶっ！」

「あーあー、気にしないでくれ。サークルの先輩だよ。ちょっと困
った人だよ。」

き、貴様… 脇腹を…
よかるう。そつちがそつくるならこつちも実力行使だ！

『なんかマリーとか聞こえたけど… 外人さん？ つばいしゃべり方じゃないわね』

「あー気にしないで、妄想癖がひどい人だからっ…！つと。あーあー、じゃ、じゃあメルアドは今度帰ったときにっ！」

私は前方から左手をミツルの背中に回し、素早く彼の左腕をこの世界の言語で言うところの『く』の字に曲げ、同時に右手で彼の左手首を押さえる。そして、両手の力を使い彼の左腕をありえない方向に曲げる。

これこそ我が家に代々伝わる由緒正しき関節技だ。

「痛い痛い痛い痛いつ！ もう電話切ったから止めてくれっ！」

「ならばとつととその『けいたい』を貸せ、私にも話させる！」

「もう切ったからっ！ だからその手を離っ！ がああーっ！」

ミツルの手からその『けいたい』がこぼれ落ちる。

すかさず私は技を解除し、瞬時にその黒い物体をすくいあげる。

ほうほう、これが遠くの相手とも話せる道具か。真ん中が開くわけだな。

開いたらこれを耳に当てればよいのか。

「あーあー、ミツルの母君殿、聞こえるか？」

「だから電話切ったって言ってるだろ！ もう聞こえねえよ！」

今にも折れそうだった貧弱な左手を押さえながら苦悶に歪んだ顔でミツルが抗議してくる。

「第一お前の世界に持って行ったところでどうせ使えないっつーの」「な、何故?」
「アンテナも何もないだろ。中継施設がないと使えないの。そんな施設作る技術とが一切ねーだろ。俺が見たところ技術レベルはこっちの世界より500年は遅れているし。っーか簡単に作られてたまるか」

あ、あんてな?

良くわからんがミッルの奴、妙に自信のある目をしている…
本当、なのか?

「それよりもそろそろ身支度してくれ…」

「何故だ」

「今日は外に出ようと思ってな」

そ、外だと!

「遂に出れるのか! この狭苦しい軟禁部屋から!？」

私は彼に声をかける。

まずは行きたいところがあるんだが。

「…どこだよ」

「この国の軍隊を見せてくれないか? 興味がある」

「駄目、っーか無理。光の速さでつまみだされる」

相変わらず厳しいのだなこの国は。

だがこれだけの技術力を持っているのだ。

きつと軍隊も私が見たこともない武器を持った、最新鋭のもの違い

ない！

「そこをなんとかするんだ、この世界の軍事技術を我が国に持ち帰れば大陸統一、戦争の早期終結に繋がる。お前だって戦争は嫌だと言っていただろう。お互いの理想の実現となるではないか」

「一方的に相手をぶっ潰した上での『平和』か？　そういうのをな、一般的に『恐怖支配』とか『侵略行為』とか言うんだ。戦争が続くよっかよっばどタチが悪いんだよ」

「戦争の終結までに多少の被害はあるだろう。だが大陸を我が神聖アラステイア皇国が統一すればその後のことは問題…」

「大ありだ！　大体俺はあの国のやり方は信用していない！」

貴様：言ったな…？

我が祖国を侮辱したな…？

「まあ俺は向こうに行くのは二度とゴメンだがな、だがお前がそんなにこっちの世界の軍隊や兵器を見たいと言うのなら今ここで見せてやる」

「なんだ、ここで見れるのか。初めからそう言え」

そういうとミッルは薄い箱のようなものを開く。

「ああ、それは昨日から気になっていたんだ。一体何に使うのものなのだ？」

「今の時代に必須の情報収集用の端末…　さっきの携帯のようなものだ」

蝶番のようになっていて箱が開かれ、中の面に何やら映像が映し出される。

ミッルはそれを慣れた手付きで操作する。

「まずは何から見せようか」

「まず歩兵から頼む、以前に貴様はこの世界では剣などほとんど使わんと言っていたな確か。歩兵が小型の大砲を持っているとか」

小型の大砲とか矛盾も甚だしいが、実際に実現可能な技術なのだろうか…

「じゃあ、『アサルトライフルの試打動画』か、こんなもんでいいかな」

「ほう、この男がこの世界での歩兵か？ 鎧はどうした？ ただの服で戦うのか？」

「そもそも鎧が意味をなさない」

「そして持っているのが言うところの小型の大砲… 要は小型の玉と火薬を作ればいいのだろうか？ こちらでも採用できないだろうか？」

「火縄銃くらいならそっちの世界でも出来るだろうな」

ズガガガガガガガッガガ

……

……

……

「…的は何製だ？」

「そんな固いもんじゃないけどな、威力は周りのコンクリ…岩を見れば解かると思うが」

……
「次は『戦車動画』とかどうだ？」

……

……

「これは…、鉄の箱が動いているのか？」

「さっきのアサルトライフルがほとんど効かないくらいの防御力はあるな」

「……………」

先についているのは大砲か。

建物がまるでゴミのように火柱と共に吹っ飛んでいく。

……

……

……

「お次は戦闘ヘリ。空を飛ぶ乗り物だ」

「そんなものまであるのか！」

なんか先ほどの画像と違って暗くて映像が良く見えないが、
なんか所々で爆発音が聞こえる。

「これは… 上空から攻めているのか？」

「うん、しかも夜だから下からはほとんど見えないうつな」

夜中の森の上から攻撃。
地上で次々に爆炎が上がる。

……

……

……

「最近では長距離ミサイルが主流なのかな……海上の船の上から撃つて……地上に落とす」

「これではどこから敵が来るのか分からないではないか」

「まあ、気づいたら時既に遅しってとこだな。ウチの国は迎撃システムとか作ってるけど、はたしてどれだけ上手くいくのやら」

……

……

……

待て、待ってくれ。

「最後に最悪なの見せようか。核兵器というやつだ。これは俺の世界でも『人に向けて』使われたのは一回しかない。しかも二回とも

「このこの国だ。何で使わないのかはもう解かるよな？」

「そんなに酷いのか…？」

「しかも最後に使われたのはこの世界で言うところのもう60年以上前。以降更に改良が重ねられているが、使用されていない」

「そんな兵器があるのならそれを持っている国の天下じゃないか」

「どこも持つてるんだよ。だからかえって迂闊に使えない」

「……………」

「で、これが60年前のこの国の映像。もっともこの時はこんなパソコンとか携帯とかはない。画面だって白黒だろ」

「む… これは爆弾か」

そして鈍重な爆音が流れ、キノコの形をした雲が出来上がり、地面に輪のような物が広がっていく。

「この一つ一つが家…なのか？」

「ああ、この一発で15万人が死んでいる」

「じゅ、15万人…」

「60年前でこれだからな。今はもつと強力なはずだ」

ま……………ば……………

「ミッル」

「何だ？」

「この世界と私の世界が自由に行き来できるようになったとして…」

「この世界との戦いが起きるようなことは…」

「否定できないな。豊かな自然に、豊富な資源。おまけに魔法とか訳の分からんものもあるし学者共にとっては興味の尽きない対象だろうな。ルフエリアン… だっけ魔法が使える奴ら。あいつらとか

は実験サンプルとして檻の中で飼い殺しにでもされんのかな。まー他の人間は特に必要ないから虐殺だってありうるし」

最悪だ。

というかそんなことを平然と行えるのか？ この世界の人間は。

背中に冷たい汗が流れる。

「もし私が異世界から来た人間だとばれたら…！」

「大丈夫、誰も信じないから。でも不法入国者だとは思われるから目立った行動はするなよ？ さ、そろそろ行くぞ」

怖い。

外界が、果てしなく、恐ろしい。

「大丈夫だって。幸いとも言うべきか、お前は茶髪に緑の瞳。見た目的に不自然でもないから。他にいた青髪とか銀髪とか漫画アニメでしかありえないような人種じゃない限り、堂々としてればそんなに怪しまれはしないって」

「本当だな！？ もし玄関を開けたら兵士が待ち構えていました、とかだったら私はお前を一生恨むからな！？ 本気で呪い殺すぞ！？」

「はいはい… あ！ 靴を買うの忘れてたな。まあいいや、お前はこのサンダルを履いてくれ。男物だけど。見た目外人だしそんなに目立たないだろ」

草履か… 農民どもが履くものだと思っていたから、まさか自分が履く機会が来るとは思ってもみなかった。

…うん、意外といいな。

着脱が簡単だし、何より蒸れない。

少し考えてみたら、こんな無防備な格好で外へ出るなんて、元の世界でも無かったかもしれない。

くそ。何だか益々不安になってきたぞ。

だが何にせよまずは外に出なければ何も始まらない。
元の世界に戻る方法も。

あえて死地に飛び込まねばならぬときもある。

…よし、覚悟完了。

「マリー…」

「どうした？」

「剣は置いてけ」

「……………」

r i s k o f b l o o d s h e d (後書き)

不定期更新でしたが、これからはもう少し早く続き書けるかも。
異形戦記のほうとリンクさせていきたいです。

My caliber

見られてる。

さつきから物凄く見られている。

あ、またこっちを見た。

「ミツル…」

「何だ？」

「先程から何度もこちらへの視線を感じるんだが…」

「そりやお前が外人っぽいからな。みんな別に変な目では見てねーよ。どこの国から来ようが、外人はみんな同じ扱いをうけるのさ」

本当に大丈夫だろうか？

油断していたら後ろから憲兵が近寄って来てばっさり、なんてことにならないだろうか。

ミツルの家から出てすでに20分ほど。

既に30人以上の住民と遭遇したが、皆が皆私の事を奇怪な目で見ているように感じる。

ミツルは大丈夫だと抜かしているが、果たして…

そしてさつきから目の前を通り過ぎる鋼鉄の箱。

頭の上を通り過ぎる鋼鉄の鳥。

どちらも凄まじい機動性でぜひとも持ち帰りたいところだが、ミツルの奴は私の世界ではあと数百年分は技術革新が進まないと再現不可能とか抜かしている。

その鋼鉄の箱の一台が道行く私達の目の前に無造作に止めてあった。

ウマと違って、鍵のようなものがないと動かない。

…これがあれば、無数に降り注ぐ弓の中を楽に突破して敵陣に切り込めるだろうに。

鉄の外壁だから、剣や槍ぐらいではそうそう簡単に壊れないだろう。うーむ、今の私では手も足も出ないのが口惜しい。

だが、このクルマという乗り物も唯一の欠点がある。

それは動く時にいかにも人体に有害そうな煙を出すことだ。

というか、まず外に出た途端驚いたのが空気の汚さだ。

どこもかしこもこのクルマとやらが走っていて変な煙を撒き散らしているせいで、鼻や喉を痛めてしまいそうだ。

この世界の人間はよくもこんな空気の中平然と歩いていられるものだ。

「アノ、スミマセン」

…なんだこの全身真っ黒の男は。

ミッルの奴は私の世界の青や緑や銀の髪が珍しいとか言っていたが、こっちからすればこんな人種のほうが珍しいわ。

縮れた髪に、手のひらまで真っ黒とは… 一度火だるまにでもなったのだろうか。

日焼けにしてもやりすぎじゃないのか。

どれだけ焼けばこんな色になるんだ。

いや、しかし下手な対応をすれば、憲兵に連行されてしまう…

あくまでも穏便に、自然に、だ。

「な、なんでしょう?」

「オウ、ニホンノヒトエイゴツジナクテコマツテイタトコロネ。ハカタマデハドウヤツテイケバ、イイデスカ?」

ううむ、道を聞いているのか?

私はこっちの地理など知らぬぞ。

「おい、ミツル。この人が道を聞いているんだが…」

「マ、マリー… お前…!」

ミツルは目を丸くして、言葉を詰まらせている。

…しまった! まさかこいつがこの世界の憲兵か!?

私の存在を不審に思い、道を聞く振りをして私の正体を探ろうというのか!?

くそっ! 周りにも人がちらほらいるし、下手にやり合うのも不味い…

上手くごまかせないものか。

不本意だがここはミツルに何とか誤解を解いてもらうしか…

「マリー… お前、なんで英語話せるんだ?」

「なんだエイゴって」

「だって今普通に…」

エイゴとかそんなもの知らん。

しかし今はこの憲兵を振り切ることが先だ。

「ミツル、ハカタという所までの道のりは知ってるか？」

「え、いや、知ってるけどさ…じゃ、じゃあマリーは通訳頼む」

「通訳？ お前が直接言えばいいではないか」

「いいから、黙ってやってくれ」

何で私がそんな面倒なことを…

余計怪しまれるんじゃないのか？

ミツルがチカテツとかよく解からない単語を織り交せて道のりを説明し、

私はそのまま黒い訪ね人に伝える。

その男は満足そうに頷いてから、私の手を取って礼を言い、そのまま去って行った。

…これで一応は助かったのだろうか。

「…どういうことなんだ…」

「さっきからどうしたミツル」

「俺が向こうで学んだ限り、向こうの世界の言語体系は英語とは全く別物のはずだ… 何でマリーがすらすらと…」

何をぶつぶつ言ってるんだこいつは。

「いや待てよ。確か俺が向こうの世界に召喚された時、翻訳魔法がどうのこうの言っていたな。それで俺は向こうの世界での会話には全く困らなかつたわけだ… だから…」

……

「マリー」

「何だ？」

急にミツルは明後日の方角を指差す。

そこには中年くらいの女性二人が何やら楽しそうに会話をしていた。

「あの人たちの会話、聞きとれるか？」

「なんだ急に」

「いいから、ちょっと近づいて聞いてきてくれ」

私に斥候を命ずるとは… 何を考えてるんだ。

私が上司だと言うことを忘れてるんじゃないのか？

くそっ、だが私はこちらの世界では勝手が効かぬ。今は奴に黙って従うしかないか…

……

……

「聞いてきたぞ」

「ああ、しかも御丁寧に会話に加わっていたな」

「しかし、どこぞの息子が受験に失敗したとか、どこどここの旦那が浮気をしているとか、こんな井戸端の話はこの世界でも変わらないものだな」

「いや、内容はどうでもいい。問題はお前が無意識のうちに日本語

と英語が話せて、聞き取りも出来ると言うこと… まさかこっちに召喚された時に翻訳魔法って奴がお前にかかっているのか？」

「…状況が読み込めんのだが」

つまりはこういうことらしい。

通常、異世界の人間を召喚するときには同時に翻訳魔法というものをかけるらしい。

そうでもしないと意思の疎通が全く出来ないからだ。

現にミツルの奴は私の世界でも会話に関しては不自由しなかった。

そして今度は私がこの世界に召喚された時。

あの時、私達は召喚士のザインという男と共に召喚の儀を行う部屋にいた。

そう、また新たな聖剣の使い手の候補とやらを召喚しようとしていたのだ。

もしミツルと同じ世界の人間が召喚されたら、余計な混乱をすぐに鎮めるため彼が事情説明することになっていた。

私は不本意ながら一応の見張り。

そしてちょうど召喚の儀が始まり、異世界との門が開いた時… 邪魔が入った。

おそらく敵国のバーツライトあたりが、こちらの召喚技術を奪うためにわざわざ魔剣使いを送り込んできたのだ。

そして、その男が魔剣の力を開放し召喚の儀の部屋をぶち破った瞬間。

本来なら異世界の人間を吐き出すように召喚するその門が私達を逆に吸い込んだ。

そして私はこんな訳の分からない世界に放り出されて今に至るのだが…

「なるほど、その魔法が私に上手く作用したからこの世界との会話に困らないわけか」

「俺にはあまり作用してなかったみたいだけどな。さっきの黒人さんも普通に速くて聞きとり辛い英語にしか聞こえなかったし。…だけどよりによってこっちの世界の全言語対応なのか？ この翻訳魔法って奴は？」

どうやらこっちの世界は言語に色々種類があるらしいな。

こちらは敵国とさえも同じ言語だと言うのに。

「ちなみに聞くが、この世界の言語は何種類くらいあるんだ？」
「詳しい数は知らないけど… 百種類くらいあるって聞いたことある」

百も… 驚いたというか、愚かだな。

もし世界を統一したらどうすればいいんだ？

民を統べるのも一苦労じゃないか。

「だから下手すれば、お前は今かなり凄い能力を持ってるぞ… 他にフランス語、ドイツ語、スペイン語、ポルトガル語、ロシア語、中国語… もし全部の人間と会話出来たら、通訳として余裕で食っていけるじゃねーか…」

：「何だかよく分からんが、私はこの世界でも優秀な人間と言う意味だと受け取っていいのだろうか。うん、そうだ。きっとそうだ。神は私を見捨ててはいなかった。」

当たり前だ。そうそう簡単に私の半生を無駄にされてたまるか。

「と、いうことは立場逆転もありうるという話だな！ 私はお前と違ってこの世界でも何等問題なくやっていけるのだ！ 日頃の行いと自己研鑽の差と言う奴だな！」

「いやーでもやっぱり通訳業はやっぱ無理くせーわ。だってお前国籍ねーじゃん。見た目外人。世界数十カ国語に対応。そして仮にも軍人だから身体能力も高い。なのに国籍不明。これじゃどこの地下組織の諜報員だって話になるぞ。もしも公安に捕まったら激しい拷問が待ってるぞ。自白剤漬けにされるぞー」

こいつ… また私を脅して…！

あくまでもこの世界での優位性を保とうとしているのか！？

「…まあいい、ところで？ あとどれくらいでお目当ての場所に着くんだ？」

「あと40分くらいかなー」

40分： 歩くのは別にどうという事は無いが、この汚れた空気を吸い続けなければならぬのが辛い。

「お前もあのクルマとやらの一つくらい持っていないのか？」

「学生に買えるか、あんなもん。つーか必要ない。俺らのような身分にはほれ、あんな自転車で十分だ。あれくらいならお前の世界で

も再現できそうだろう？」

ジテンシャ… あの鉄製？の小型の二輪車か。
特殊な装置もなさそうだし、確かにあれくらいなら…

と思っただが、駄目だ。

機動力、運搬力共にウマと大して変わらん。むしろ劣る。

日常生活では便利だろうが、軍には全くと言っていいほど必要ない。

「そもそもなぜ自転車を使わん。あれくらいなら二人くらいは」

「二人乗りは禁止。警察がうるさい」

ちい。

だが、これだけの機動力を持った乗り物が溢れかえっている世の中だ。

きっと衝突事故なども多いから、規則が厳しくなるのも当然…

「はあ〜あ〜」

隣でいきなりミツルが肩を落としてわざとらしい大きな溜め息をつく。

「…また何か文句でもあるのか」

「ああ。実は俺自転車二台持っていたんだよ…」

なぜ過去形なんだ。

こちらが尋ねる前にミツルは誰を見るでも無く歯を噛み締めながら話を続ける。

「くそ…！ 俺のクロスバイク…！ 十万もしたのに…！」

「この世界の貨幣は解らんが… 何かあったのか？」

「それに乗ってあちこち一人旅していた時に召喚されたんだよ！

今から広島までどうやって取りに行けばいいんだ！？ つーかもう半年前の出来事だからとつくにパクられているか、処分されてるだろーしよ！」

街中だというのにミツルはみつともなく喚き散らす。

人通りは思ってたより少ないし、クルマとやらの走行音でかき消されたのだが。

「だから、何があっても俺はアラスティアを信用しない。人の都合も考えず勝手に呼び出しやがって。この世界を魔の手から救ってくださいならまだ考えてやらんこともないけど、戦争に協力しろとか死んでも御免だ。大体だな…」

違いが解らん。

というかそんな下らん理由で我が祖国を嫌っているのか？

確かに私も闇雲に異世界の人間を呼び出すことには肯定出来ないが、召喚されたのがこんな戦いの字も知らぬド素人では。

例えば本当に聖剣の使い手が現れたとしても本当に戦局を変えられるのか怪しい。

戦争はそんなに甘くない。

だが、帝の意向には逆らえない。あの方も国を思っていることだろうし。

うーむ。

だがそのことを考えると、こんな所で油を売り続けて良いものかも焦ってしまふ。

早々に帰る手段を見つけねばな…

そして持ち帰る物の選定もしないとな。

私の世界でも技術的に再現可能な物…

あとこの世界の歴史と戦術とかも有用ではないだろうか。先人の知恵に及ぶ物は無いというし。

「…だから、お前も今ならそう思えるだろマリー？」

「何の話だ」

「…人の話聞いていたのか？」

「いや」

「そうかい…！」

ああ、時間が惜しい。

…ふと気づくと私たちは橋の上を歩いていたようだ。

右手には海、か、これは。

「…やはり汚いな」

波一つ立たない焦茶色の水面が妙に腹立たしい。

My caliber (後書き)

魔剣：本数に限りがあるが誰にでも使える強力な剣。

聖剣：使い手を厳しく選ぶ、魔剣よりも遥かに強力な剣。
くらいの認識で。

どうせ、こっちの方では大して話に絡まないのだから(笑)

本編(異形戦記)の方で多少詳しく説明します。

World watch(前書き)

一話あたり4000字くらいを目途にしています。
結構短く感じるなあ。

World watch

現在、私はこの地区一番の繁華街とやらにいる。

高峻な建物が規則正しく並び、街の大部分に影を落としている。この高層ビルという建物は初めて見たうちは圧倒されてしまった。しかしよくよく眺めてみると何と云うか、趣が無い気がする。

これだけの高層建物を立てる建築後術はたしかに素晴らしい。向こうから技術者を呼んで習得させたいくらいだ。

だがこの都市の中で日常を過ごせるのかと云うと… 無理だ。

息苦しい。

とてつもなく空気が悪い。

「どうだ？ ここの街は。一応この辺りでは一番の繁華街なんだが」

「空気が酷い… 喉と肺がどうにかなりそうだ…」

「…お前って案外脆いんだな」

こんな粉塵まみれの通りで、脆いも糞もあるか。

何で貴様らは平然と歩いてられるんだ。

「だけど空気が悪いのは本当かもな。俺も向こうの世界の奴をずっと吸ってたから、こっちに帰ると改めてその汚れっぷりがわかるよ」

「何とかしろ… あれだ！ あの全身紺色の服を着た長髪の女が口に付けている白い口あての布！ あれを用意できないか？」

「マスクか？ あれは別に空気が悪くて付けてんじやないけどな…」

ドラッグストアにでも行けばあるんだろうが…」

「よし、そこに行くぞ」

「…ここからだ結構遠いよ。外が駄目なら地下通ろうぜ。ちょうど入口見えてきたところだし」

ちょうどミツルの奴が指差したのは地下へと続く階段。

正直言って地下の空気も好きではないのだが。

車によって汚染された空気を避けられるだけ幾分かマシ、なのか。

だが、階段を下りた先は私の予想を大きく裏切る光景。

地下道というのは暗くて湿ってて窮屈で空気の薄いイメージがあったのだが、まず目に入って来たのは大量の人、人、人。

空気は外に比べればと言うほどだが、それも人の熱気によるものが大半のように感じる。

照明もさんと輝いており、何やら店もずらりと立ち並んでいる。

「くう。ここには… 地下都市も存在するのか」

「そんな大層なもんじゃないけどな。店とかがあんのはここだけだよ。大通りのビルとは大抵繋がっているしかなり便利にできているけど」

「…この空気はどうなっているんだ？ 地下はもっと湿気が多い気がするのだが」

「空調設備の差かなー ああ、この技術も向こうの世界じゃ数百年は待たないよ」

ぐぐぐ。

ここでも技術力の差を強調するのか。

いちいち言葉の端々に混ぜてくるのが腹立たしくて仕方がない。

「で？ そもそも貴様はここに何をしに来たんだ？」

「まあこの辺りの街を見せようつてのと、色々買い揃えようと思つてな。お前のために。まずは服。だけどユニクロ限定な。出来るだけ安いのにしてくれ。上下2、3着くらい買えばいいかな」

「安い物と言われても、この世界の貨幣など知らんぞ？」

「…文字を全部とは言わないから、せめて算用数字だけは覚えてくれ。これは万国共通だから、10個くらいなら覚えられるだろ？」

ミツルはそう言うと昨日のメモ帳を取り出し、数字について説明する。

なるほど、0、1、2、3、4、5、6、7、8、9の順に大きくなるわけか。

そして9の次は横に0が付け加えられて桁が一つ上がり再度1からこちらの世界でも十進法を採用しているのは幸いだつたな。

これならすぐに覚えられそうだ。

私達はしばらく地下を歩いた後、建物の地下に直接繋がっている所へと左折。

さつきから気になっていたのだが、洋服屋をやたらと見かける。

この世界の人々はそんなに着る物にこだわっているのだろうか。

いや、厳密にはこの世界の「女」。通りで見かけるのはそのほとんどが女物の服。

小物や装飾品、あとは軽食の店だろうか、店と言う店の客の大半が女だ。

道行く人の男女比は同じくらいに思えるのだが、男の方は単なる通り道としか思っていないのだろうか。

「ここは… この街は女達の方が活気があるな」

「ん？ まあ、な。そもそも男が用入りの店がほとんど無いっつか」

「外は違うのか？」

「どーかなー でもここらへんの店はやっぱりほとんどが女向けだよ。ちよつと裏通りになると男向けのアングラな店が増えるけどさ」
家事の一環… という風には見えない。

店員も客もほとんど女。ここは女だけで経済が回っている感じがする。

軍人らしき姿も見えないし、農地も全く見られないとなると、この世界の男達は一体どんな仕事をしているのかが逆に気になってくる。

「この上だ」

「な…！ これは… 階段が動いている、だと…！」

「テンプレの如き田舎者の反応だな。ああ、それと端に寄れよ」

こんな生活の端々に圧倒的な技術力の差！

これだけ高い建物だと足腰の悪い者には不便だろうと思っていたが…

洋服の店に入ると明るい店内に衣類がずらりと並べられている。

一店舗に置くものとしては私の世界では考えられない数。

それでいて店員は店の広さとは対照的に少なめ。

大衆用ということで人件費の削減も狙っているのだろうか。

「一応自由に試着していいことにはなっているけど、皺苦茶にしないようにな」

「ほう、大衆用の店にしては質は中々いいじゃないか」

肌触りは文句無し。

ほとんどが単色でまとめられていて、飾り気が少なく感じるのが残念だが。

まあ、安物ならこんなものか。

えっと出来るだけ「0」が少ないものを。

うん、これとこれと…これにしよう。
大きさは…これでよしと。

「よし、決めたぞ」

「はやつ！（仮にも女だし）もう少し服選びに時間食うと思って
いたのに…」

「指揮官たるもの迅速な決断力が大事なのだ」

私は早々と服をミツルに渡し、会計に行かせる。

女の店員がこちらの事をじろじろ見ているが気にしてはならない。

毅然と。

自然に。

「あの…お二人は付き合っているらしいんですけど？」

女の会計が小声でミツルにそんな内容の話をしているのが聞こえる。
元の世界にいたなら無言で張り倒しているところだ。

「まあ、そんなところです」

…こいつも帰ったら殴っておこう。

気が付くと他の視線もちらほらと刺さっていた。

「綺麗な髪」

「脚ながーい。やっぱり外人さんは違うなあ」

「モデルとかやっているといらっしやるんですか？」

世辞と言って機嫌を取ろうとでもいうのか。

こちらはそんなものは慣れきっていて冷めた感情しか抱かないぞ。城にいた時代も甘い汁を吸おうと、意地汚い貴族たちがよく寄って来たものであった。

『円卓』にいと城の誰もから羨望と畏怖の眼差しを持たれる。それはよいのだが、私欲丸出しの蟲共を近づける格好の蜜であったのも事実。

そして、そんな日々少し疲れていたのもまた現実。女だからと見くびって、畜生以上に汚らわしい求愛の言葉を投げかける腹の出た豚共の多いこと。

…今ふと思つたが、ミツルの奴も後に婿養子の座を狙つたために、ここで私に恩を売っているのではあるまいな。うーむ、その可能性も否定できない気が。

一応牽制しておくか。今朝の関節技は効果靦面だったな。次に妙な事を口走つたら即決めてやろう。

「終わったぞー やっぱりお前がいると結構目立つな」

「…下手に怪しまれることは？」

「それはない。でもお前はまだ周りの人と話さない方がいいかもな」

ボロが出る、と言うことか。それならば仕方ないだろう。

祖国の、いや、元の世界全体のためだ。

「で、次の店は？」

「本屋かな」

「…文字はどうするんだ？」

「それはあんまし期待できないけど、少なくともお前にはこの世界の法律や文化を知ってもらわないといけない。帰る帰らないにしてもここにしばらくは住むわけだしな」

「それは解かるがどうやって？ 今朝の『パソコン』とやらでもい

いのでは？」

「あれは下手に素人に使わせると壊しそうだから。図解の入った本なら何となくでもわかるだろ？」

要はこの世界での絵本でも読めと言っのだろうか。

しかし「パソコン」なる物が発達していると、もう本の必要性など薄れるのではないだろうか。あれだけの映像と音が保存できる代物だ。

喧騒と汚濁した空気に包まれた野外を少し歩いて、今度は本屋へ。このくらいの規模なら、まだ我が国の王立図書館の方が勝っているが。

例によって動く階段を上り案内されたのは、まるで風景からそのまま切り抜いてきたかのように精巧に描かれた図解が描かれた表紙の本が大量に並べられている一角。

「つつても、金もあまり余裕がないし。図説の地理はウチにあるからな… 日本の歩き方とか：中々無いもんだな。あっても誰が買うんだって話だけだ」

何やらぶつぶつ言っているが。

それにしても、この世界の文字はさっぱりわからん。

丸みを帯びたもの、角ばったもの、単純なものあれば何故こんな文字を使うのかと不思議に思うくらいの複雑なものまで様々。

かといって、この世界の人間がそれを全部使いこなせるかと聞けばそうでもなし。

今朝、パソコンとやらで世界中の情報を調べることが出来ると言っていたが、それならば言語の統一くらいしておいたらどうなんだ。

「ん〜 少し高いけどこいつにするか。子供向けだしパツと見今の

機械の仕組みとかも書いてあるから色々勉強にもなるだろう」

ミツルが持ってきた本は表紙に子供たちが並んでいる絵が描かれていた。

しかし、その絵に似合わず本自体はかなり分厚く重量感がある。

「小学生向きとか書いてあるけど最近のは侮れないよな。大人が読んでも普通に一日潰せるぜ」

「ちよつと貸してみる」

適当なページを開いてみる。

「これは…クルマというやつの図解か…！ いや、空を飛ぶ乗り物の内部まで…！ 確かに侮れん！ パソコンやケイタイについても書かれているのか！」

「再現できるかどうかは置いて、こんなのを向こうに持って帰ったらあつちの科学者が黙ってないだろうな。技術革新が100年くらい前倒しするんじゃないか？」

「ふふ…ミツル。これに関しては貴様に感謝せざるを得まいな」

例えすぐにこれらの物を作ることが出来ないにしても、そのための重大なヒントがここには描かれている。その優位は凄まじいものになるだろう。

アサルトライフル、この鉄砲とやらくらいに通じるものが開発出来れば戦局は一気に傾くはずだ。さすがに核兵器とやらは載って…いないだろうな。

「はあ…やつぱり教えない方がいいのかな… でもこのままだと、この世界ででまともな暮らせないだろうしなあ…」

ミツルが何やら隣で頭を抱えているが： ふふん、もう遅い。
技術さえ手に入ればこんな世界には用はない。

元の世界に帰る方法を見つけるまでこの本の翻訳作業にでも勤しむ
としよう。

「ミツル」

「何だよ？」

「これだけの技術力がある世界なら、きっと元の世界に戻る術が書
かれた書物もどこぞやに」

「無い」

「無いことは無いだろう」

「無いったら無い」

ちい、どこまでも強情な奴だ。

World watch (後書き)

結構ローカルなネタを挟んでいるのですが何人が気づくのでしょうか。次回はさらに多くの地元ネタが入ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9681o/>

円卓の女騎士

2011年9月5日22時46分発行